

バプテストの教会論：共にキリストの心を識る

カレン・E. スミス

共にキリストの道を識ることに努めると言うとき、イギリスのバプテストにとってそれは各個の教会としてそうすることはもとより、さらにはより広く、まさに地方や全国レベルの群れとしてそうすることをも意味している。そして、そこには幾つか、依拠する重要な神学的テーマがある。このセミナーではすでに2回、1) 良心の自由の強調と2) 他の信仰者たちとの共なる分かち合いの重要性というタイトルでセッションが持たれたが、そこでもそれらについて触れられた。要は、キリスト者は単独の信仰者としてあるのではなく、キリストを通して神御自身との関係性に、神によって呼び出された存在であるということ。また、人間相互の関係性へと、同様に神によって呼び出された存在であるということである。「集められた信仰の共同体」として共に集うということが、17世紀イングランドのバプテストたちにとっては神への応答と理解されていた。神御自身が人々を共に「集わしめ」、互いを契約の関係性へと呼び出されたと信じたのである。

35年前、ある論文集が刊行された。『愛に結ばれて—バプテストの生活と宣教の契約的基盤 (*Bound to Love, The Covenant Basis of Baptist Life and Mission*)』と題された論文集で、寄稿したバプテスト派の神学者たちは読者に、契約によって結ばれた教会生活の再考を促した。そして、「契約に言及する神学は十字架と復活の救い主、教会共同体の唯一の創始者、『交わり』『平安の秩序』『完成』、そして『権威』という言葉に極めて新しい意味づけを行う中心的存在としてのイエス・キリストの正当性を認めている」と強調した¹。ここでは、いかなる理由で契約の関係性がバプテスト教会の中心であるべきかという神学的、歴史的、牧会的理由を繰り返す時間はない。しかしながら、初期のバプテストたちが聖書から示された理解を自らの共同体の基盤に据え、キリストを信ずる者として、私たちが神の愛にあつて相互に結び付けられているとしたことは重要で、忘れてはならない。すなわち、私たちは自分自身のことを、組織の単なる一部だとか、あるいは何らかの人間的な同意や賛意によって各個教会の教会員となっているとか、同じようにして各個教会を超えた広い組織や連合体に連なっているとか、そのように考えるべきではないと言っているのである。〔現在の英国バプテスト研究のリーダー格の神学者〕ポール・フィデス (Paul Fiddes) は事あるごとに次のように語って、私たちにそれを喚起している。曰く、「神が契約の取り交わしの主導権を握っている」²。

¹ Keith W. Clements, 'The Covenant and Community' in *Bound to Love: The Covenant Basis of Baptist Life and Mission* (London: The Baptist Union, 1985), p. 60.

² Paul Fiddes, 'Covenant – Old and New', in *Bound to Love*, p. 10.

言い換えれば、私たちは自分たちの人間的な決断だけで交わりに入るのではない。そうではなく、神に呼び出されることによって初めて、他者との交わりに入るのである。

1686年の信仰告白は、各個教会の教会員について、次のように告白している。

神に呼び出された聖人たちは（信仰の告白と実際の歩みにおいて、またそれらを通して）キリストの呼びかけに従順なることを見える形で表わし、証しとする。そして、キリストの命じられるところに従い、共に歩むことに喜んで同意する。そのようにして、神の御心みこころに基づき、福音の教えに従うことを告白して、自分自身を主に献げ、また互いに献げ合うのである³。

会衆〔教会〕は契約の関係性において神に呼び出されているので、神によって可視的な信仰共同体として呼び集められていることを強調する契約への同意を文字にしたのである。共にあることによって、彼らは教会員としての責任とその恩典の両方を誓ったのである。忘れてならないのは、契約文は入会して共に結ばれるために要求される詳細な規則の一覧でもなければ、信条として見なされてもいなかったということである。その反対に、教会員は互いを心に留め、「互いの重荷を負う」だけでなく、「霊的・肉体的な弱さも共に負う」ことを約束し、そのように受け入れ合ったのである⁴。教会のいろいろな会議は定期的に行われたが、それはキリストの命を分かち合う方法として理解されていたばかりでなく、共にキリストの心を見極め、識るための方法でもあった。このような教会の諸会議は、共に集い、共に祈り、神の霊が教会に語ろうとするところを共に聴き、判断する時として理解された。スティーブン・ホームズ (Stephen R. Holmes) が正しくも指摘したように、「教会の会議では人間が主導権を握ってそれを治め、統治するのではなく、（略）そこで出席者全員がなすべきことは自分たちの思いや好みを優先し、それを主張するのではなくて、たとえ多数票を得られなくても、キリストの思いを共に聴き分け、共に識るということである」⁵。

確かなことは、初期のバプテストは教会の話し合いの場を財務に関する決定を行ったり、執事会や牧師の決定を承認するだけの単なる「事務会」とはしなかったということである。そうではなく、そこはキリストにある交わりの明白な表現の機会であった。その意味で、教会の会議の場では、あらゆる社会階層に属する人々、あらゆる能力を有する全教会員が協議や討議、決定に参加する対象とみなされた。主の晩餐がそうであるように、教会のあらゆる会議は社会的に認められた地位の有無に関係なく、すべての教会員が共に集う時であった。言うまでもなく、包括的であることの強調は事柄の是非を見分ける際の不可欠な原理である。誰もが互いに聴き合うために自由に集まり、互いの考えを共有する。そして、まさにそこにおいて、アーネスト・ペイン (E. A. Payne) も言うように、「活け

³ 'Second London Confession, 1689', in *Baptist Confessions of Faith*, ed. W. L. Lumpkin (Valley Forge: Judson Press, 1969/1983), p. 286.

⁴ '1697 Covenant of Benjamin and Elias Keach' in Charles W. Deweese, *Baptist Church Covenants*, (Nashville: Broadman Press, 1990), p. 120.

⁵ Stephen R. Holmes, *Baptist Theology*, Doing Theology Series (London: T&T Clark, 2012), p. 102.

るキリストの聖霊が己が民と共にいて、より十分なる真理の理解とさらにも聖なる命の道へと民を導き給うと信じる信仰」をバプテストは堅持したのだった⁶。言うまでもないことだが、ここでの聖霊についての認識として、それが人々の間で「指導者」と目されている（また、自分自身をそのように自負している）者たちだけにではなく、すべての信仰者の群れに対し、その間を自由に動いて働き、集う個々人に親しく自らを明らかにする存在と信じたことは重要な点と言えよう。

さらに言えば、キリストの心を求めることは教会の諸会議の場に限定されたことではなかった。礼拝もその時だったし、とりわけ神の言葉が取り次がれる説教は、それを通して神の語りかけを聴き、キリストの導きを求める時として理解されていた。それゆえ、18世紀の賛美歌作家 アン・スティール（Anne Steele, 1717～1778）は、御言葉の中で「救い主の声を聴き」「救い主を認識する」と、そう表現したのである⁷。個人にとっても共同体にとっても、礼拝はキリストの心を共に聴き合い、識る時であった。もちろん、集められた教会全体に関わる個々の具体的判断については、キリストの臨在のもと、皆で共同して決定せねばならないのは当然である。

事態はどう変わったか

歴史から何を学び、今日に生かせるか

近年、教会全体（特に西欧世界の教会）が総じて直面している最大の挑戦の一つは、「ビジネスモデル」を軸にして教会形成を目指すべきとのプレッシャーである。ユージン・パターソン（Eugene Peterson）は『熟考の牧師（*Contemplative Pastor*）』という自著で、時に「（企業のように）教会を運営する」という考えに惹かれる牧師の心情について、次のように指摘している。曰く、「教会の運営」という考え方に心惹かれる時、牧師がそこで問うのは「何をしようか？」ということであり、「どのようにして、また事を進めるか？」ということである、と。そして一方、次のように述べてもいる。「魂の癒やし」を求める人々の側について言えば、その関心は「神はここ〔教会〕で何をしてくれてきたか？」「ここでの生活を振り返って、どんな恵みの跡を見ることができるか？」ということであり、また「愛のどんな実際を、このグループの歩みの中に読み取ることができるか？」「神は具体的に何をして、この自分を元気にしてくれるのか？」ということである、と⁸。パターソンの言わんとするポイントは、当然ながら、神はすでにイニシアチブを取って、事に当たっているということである。であるから、働き給うその神と共に、それが何であれ、聖霊の御業と考えられる事柄に参与していくことが人間のなすべきことであると言うのである。

⁶ E. A. Payne, *The Fellowship of Believers, Baptist Thought and Practice Yesterday and Today* (London: Kingsgate Press, 1944), pp. 20-21.

⁷ Verses 1, 4, 6 Anne Steele, 'Father of Mercies' in *Baptist Praise and Worship* (Oxford, UK: Oxford University Press, 1991), p. 143.

⁸ Eugene Peterson, *The Contemplative Pastor: Returning to the Art of Spiritual Direction* (Grand Rapids: Erdmanns, 1989), p. 61.

バプテストについて言えば、「ビジネスモデル」の採用は 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて始まったもので、それが（21 世紀の）現在、各個の教会や地方連合、教派組織にまで影響を与えていると論じてよかろう。時間の関係から、ここではディスカッションの口火として幾つかの例を挙げるに留めるが、次のような現状が認められる。

- 1) 牧師と執事は自分たちを教会の「指導者」と考え、教会の会議で話し合う前にすでに自分たちで結論を出し、教会員には報告がなされるだけという例が増えている。
- 2) 多くの場面で「いかに事を進めるか」が重視され、そのための目標設定が強調されている。また、すでに進行中の神の御業を識ろうとする時間を犠牲にしてでも、特定の目的や目標を達成することが優先されている。
- 3) ある場合には、地方連合の会議が、意志決定のプロセスに人々が関わっていると実感できるようなものになっていない。反対に、「執行役員会」の如きところで決定がなされ、会議にはそれが報告されるだけである。信仰やその実践に関わる大切な問題を話し合うためにそこに集まっているという感覚が会議のメンバーたちにほとんど見受けられないことも少なくない。
- 4) 全国レベルに至っては、「執行委員会」のどこにも属していなくても意見を表明できるような場所は、バプテストであるにもかかわらず、もはやないように思われる。バプテストは運動体と言われることがあるが、そうあることによって、互いを結び付けているその契約的基盤を喪失してしまっていないだろうか。

〔略：イギリス固有の社会制度に関する一節のため〕

もしもこのまま「ビジネスモデル」を続けるとすれば、信仰共同体として共にキリストの心を識ろうとすることを私たちはもはやしなくなるのではないかと懸念するが、それは言いすぎだろうか。私はそうは思わないのである。それとも、私たちはすでにキリストの心を識っているとでも言うのだろうか。〔略：同前〕また、教会や地方連合、教派団体で「責任者、指導者」とみなされている、いくばくかの人たち。彼らだったら、「キリストの心」を識っていると言えるのか。

私が言いたいのは、契約を基盤とした生という考え方を、組織運営の方法や手段としてビジネスモデルに代えて用いるということではない。そうではなく、ビジネスモデルの無思慮な使用を止め、人々を呼び出して集め給う神によってこそ 教会は教会となることを、共々いま一度、信じたいのである。契約を基盤とした生を、神が起こしてくださる。そうであれば、キリストにある私たちの繋がりとというのは単に選択の事柄でもなければ、自身の組織化に便利な方策というのでもない。むしろ、相互の共なる生を、神に対する応答として捉えるべきである。

共にキリストの心を聴き取って識るということは、決してたやすいプロセスではない。教会は群れとして共に集うところなので、キリストの御旨は通常、皆が揃って集い、交わりを共にするそのところで啓き示されると考えられる。とはいえ、最初期のバプテストもそうであったように、聖霊の導きに関して教会員の一致が得られず、ついには道を分かつような時もないとはかぎらない。しかしな

がら、見解の相違から最終的に分裂に至るそのような時もある一方で、同時にまた、「共にキリストの心をたずねる」姿勢が当該問題についての見方を変えさせたり、意見を異にすることを受け入れさせたりすることもあることを忘れてはなるまい。さらには、たとえ考えが違ったにしても、それをもってキリストにある交わりが妨げられるようなことがあってはならないと、少なくともそのように導かれることもあることを覚えておきたい。その意味で想い起こされるのは、1780年に採択されたニューロードバプテスト教会の教会契約に記された素晴らしい一節である。〔同教会はオックスフォードにある歴史的な教会だが〕バプテスマの形式としてどのような形が適切か、当時、意見が分かっていた。そのことにきちんと言及しつつ、同契約文はしかし、引き続き「等しく同じ厚意と愛の中へと互いを受け入れ合うことに同意する」と約束の言葉を記している。以下の通りである。

我らの間には、信仰者たる両親の子どもとして、父・子・聖霊の御名によって幼な子に滴礼を授けることをキリスト教の真正なバプテスマと確信している者たちがいる。だが、その一方でまた、キリスト教の真正なバプテスマは、自身の悔い改めと信仰と神の恵みの体験の告白に基づき、三位一体の聖なる神の御名において、浸礼によって成人に執行されるものと信じる者たちもいる。こうした見解の相違はあるものの、我らはしかしながら、等しく同じ厚意と愛の中へと互いを受け入れ合うことに同意し、これを約束する。これは、なかんずく、次のような理由による。すなわち、かかる見解の相違をもって、狭義には主の晩餐への陪餐を禁じる根拠も、また広義には教会の交わりへの参加を禁止する根拠も、神の言葉たる聖書の中にそれらのいずれをも見て取ることができないからである。しかも、いずれの側の者たちをも主イエスは受け入れ、御自身のものとしてくださっているとしたら、我らもまた、そのようにすべきと考える⁹。

（金丸 英子訳）

⁹The covenant of New Road Baptist Church, Oxford

<http://www.newroadbaptistchurchoxford.co.uk/content/pages/documents/1312454439.pdf>, consulted on 08 May 2015.